

第二部

思い出の記

今
よみがえる

なつかしき日とよ

あゝ土のにおい 木の香り

木の葉のささやき

さあ ともに語らん

懐かしの山林を

在学時代の思い出

二五回 松原 誠一

我が母校、木曾山林高校が創立百周年を迎える事の由。悠久百年というこの事実が唯々うれしく、先ずは心よりお祝い申し上げます。九十才を越えた今、七十年以上も前に卒業した小生の学生時代を思い出してみます。

受験・合格、そして入学

大正十四年、日本に唯一校しかない長野県立木曾山林学校に入学したいとの希望に満ちて受験をし、そして合格の通知あり喜びこの上もなし。当時の感銘はいまだにあり、父母に感謝す。大正時代に中等学校に進学する事は、余程の上流家庭か勉強心旺盛でなければ出来なかつた時代である。私の家は貧乏だつたけど受験を父母に再三再四頼んだ。父母は「受験してみろ。合格すればその時考える。何とかしてやる」といわれ必死に勉強した。先生に頼んで補習授業をもらった事もあり、それが報われた。

その当時、私の住む村の同級生で高等科卒業生は十名だつた。男八名、女二名だつた。長野工業学校、東筑農学校、木曾高等女学校、木曾中学校、木曾山林学校への受験者は八名で全員が合格した。父母に入学を懇願して許してもらつた者ばかりで

あつたと聞く。

(この頃は尋常高等小学校だから、高等科を卒業しなければ受験資格が無かつた)

私は家庭と弟妹五人の事も考え一生懸命やるんだと自分なりに心に決め、遠縁の下宿稼業をしている下宿屋の下働きをしながら通学し、若干下宿代金を安くしてもらい頑張つた。が、自由な時間はあまりなかつた。

働きながらの学生生活

叔父からの多少の援助に加え、自分でも働きながらの学生生活であるから、留年(落第)は絶対出来ぬと心に決め、何としてもやり抜かねばならないと決心したものだ。

そして入学式。学年は甲・乙組とあり、私は乙組で級友は確か五四人だつたと思う。

木曾出身の同級生は高等科を出たばかりの者だつたので皆小柄だつた。しかし全国から集まつた入学者には大柄な者が沢山いた。年齢にも差があり、なかには陸軍軍曹で退職したのち入学してきた剛の者もいた。級友とはいえ大人と子供みたいな違いであつた。福島町以外の木曾出身者に嶺風会という組織があり入会させられた。

学校には、寮生、汽車通学生等たくさん生徒が居たので、卒業するまで言葉さえもかわさず、名前も出身地も知らない先輩がいた。

私のカバンは木綿風呂敷だ。三年間カバンを求めず（買えなかった）、それで通した。

入学すると、それぞれ何かの部に入らなければならなかった。私は庭球部に入学した。練習は毎日きびしかったが、二年生の時長野県大会と近県の大会が開催され、先輩とダブルスに出場し優勝できて本当にうれしかった。

優勝旗を先頭に、校歌を歌いながら町の中を学校に凱旋したあの青春の熱き思いは、今でも忘れることができない。

森林学、この幅広きこと

教科の学習は、四人の先生が入れ替わり教示された。数学・理科・測量等、それなりにみっちりとしぼられた。測量学は、測量士補の資格が交付されると聞かされていたので、みんな特に頑張ったが、意地の悪い先生がいて、臨時試験に出した問題をまた本試験に出すという意表をついたやり方に、クラス全員啞然として「参った」の感あり。まことに笑えぬナンセンスだった。

悲しいかな、三学期の中頃から級友の中から退学する者がけっこう始まった。

実習は、裏山演習林と権現滝演習林で行われたが、大変な思い出ばかりが残っている。測量・伐採・地拵え・植林等。辛い作業で腹は減るし……。そんな時、思わず実習歌が口に出る。うまくつくったものだ。

学校軍事教練や教官排斥事件等々

これがまたまた辛かった。甲乙二組同時の訓練で、教官は大尉と軍曹であった。軍隊に入隊したら、すぐに中隊長・少隊長になれるような素質づくりが目的で、三年間本当に厳しくしごかれた。このしごきが、卒業後、社会人となり軍隊に入営した級友で、幹部候補生に志願・任官した折、上官の受けもよく大いに役立ったと聞く。

私が二年生の時、教官の追放事件に巻き込まれ、全員行動で同盟休校の手段がとられた事があった。二年生の中にも数人の首謀者が居たことを後日知った。

日義村の、木曾義仲公旗上げ八幡宮に全員結集し、趣意書・血判書・カミソリ等が用意され、指先を切り血判書に署名・押印したという。この事件は、司直の手が入り、首謀者の数人が退学及び停学処分され解決した。

後日、この血判状を眼にした父兄が、血印の大きいこと、見事なことに驚愕の声をあげたという。血判状は今どうなっているのか知りたいものである。現在でも、日義村のこの地を通過する度、思い出を新たにし敬礼する。

そしてその年の冬、寄宿舎の寮生に加勢して、舎監を閉じ込めてしまいういたずらをしたこともあった。校庭の隅にある池の水を四角に切り取り、長い廊下を滑らせ、舎監室の前に積み立てて封じ込めをはかった。

修学旅行の事など

昭和二年五月、東京・日光方面へ修学旅行に立った時の思い出も強烈である。足尾銅山見学の後、日光いろは坂へ約三・四里の峠道を歩きながら当時の流行歌「酋長の娘」を全員で楽しく歌いながら前進した。なぜかそれ以来、この歌は今でも思い出しては口ずさむ事がある。

日光見学後、翌日東京浅川駅に到着した時、なんと「木曾福島町大火」の報に接し、先生方も生徒一同も愕然とする。母校は、自宅は、下宿先は……。皆顔面蒼白であった。

やむなく急きよ木曾へ帰ることになり、汽車に乗ったものこの時ほど、汽車の鈍い動きと気のもめることといったらなかつた。それぞれが汽車の中を走り出したい気持ちだといって苦笑した。夕刻、ようやくにして木曾福島到着。母校の姿がそのままである事を確認出来た喜びは言葉で表現出来ないくらいであった。

しかし、先生や級友の家・下宿先等が丸焼けとなり、当分の間登校不能となった。また、女学校も焼け出されて、女生徒を木曾中または本校へ間借り授業する話も出たが、男女席を同じゅうせずの時代のこととて、教官たちの強い反対意見があり実現せずじまいに終わった。いやはやこの事件は、実に残念なことであった。

終わりに

私たちの卒業時の人数は甲乙両組合わせて四九名であった。当時は同級生の中に留年者も多数おり中には五年間または六年間も在学していた猛者もいた。私たち「昭三公」(昭和三年卒業生)が、卒業五十年後はじめてのクラス会を開催した折りは、あの紅顔美少年たりし面々が、まるで浦島太郎の世界で相まみえ、それぞれが名乗り合い涙を流しての再会で実に懐かしかった。その後は、全国に散らばった級友の居住地等を順番に回り、婆さん同伴で旧交を温めているが、この勇士も現在では十二名になつてしまった。それでも、お互い英気を養い鼓舞しあつて母校の百年祭には是非出席したいと意気軒昂である。

最後に、母校木曾山林高校の今後益々のご発展と、未来永劫の称栄を祈念申し上げ筆をおくことにしたい。

木曾山林高校、創立百周年万才、く、く。(了)

山林高校百年祭原稿

二七回 宗田 尚久

当時、岡部校長の発想と思われるが、本校は林業科のみでなく木工業の基礎を学ぶ必要があるとして木工専修科が発足した。小学校卒業の年、この説明案内書を担任教師が紹介し「実業学校の第一回生というものは大変意義がある。林業以上と思うの

では非薦めたい」と大いに称えたので私は入学を決心した。

故郷は、雑林が多いが農地の少ない養蚕地で、これもあまり性に合わない職業であり、自分一人で思う成果の上がる仕事でなかった。木工ならたとえ木の根を削っても工芸品は出来るし、木工業か建築業にと志は燃えた。しかし入ってみると、一年や二年で独立開業できる仕事でないと思つた。途中で退学しようと思つたが一年間の人生勉強と思ひ直し我慢した。先生からも言われた。一年や二年で独立開業できるわけがない、しかし半日の勉強と半日の実習に、デザイン設計製図が学べるだけでも、年期奉公だけより良いと思つた。

さてその一年の出発点は寄宿生活だ。入るが早いか上級生のシボリだ。さもないことに態度が！言葉が悪い！と記念公園に二、三人の先輩に呼び出され、ぎゅうぎゅうシボラれる。これを修業と思つて我慢はするが、通り過ぎる通学生にはそんな仕置きは知る由も無い。シボラれ放しで一年でシボツた者を後目に卒業した。

卒業してみても、「やはり学校は違う」とつくづく思つた。勉強嫌いで年期奉公に入るものと一緒に考えられてたまるかと感じた。

私の書きたいことは山ほどあり、今年始めから一代記の編集中であるが、山林学校入学当時は大正から昭和の大不景氣の時代であり私が物心ついた時、当時の感動詞「木枯らしはふく、木の葉は飛ぶ、家に籠り外に出るな、世はまさに危険信号だ！

警鐘は乱打される、急局を告げる！警鐘乱打は続く！大正年代の大不況、関東の大震災勃発す。井戸水に注意せよ。朝鮮人問題で『戦慄』。農民よ意志あらば海外進出も考えよ』……にあるように、国としても南米ブラジル移民政策がとられた。また「青年よ大陸へ！」の合言葉のもと、満州移民開拓団の薦めも始まる。その後満州事変の勃発である。先輩の大竹君も南米ブラジル移民で卒業式を前にして卒業を許されブラジル移民として出発して行つた。これは山林学校としての第一号者であつた。当時私はつくづく海外発展の先駆者、大竹君は偉い人だと思つた。

私も木専第一回生として一年で当時の中等学校卒となれたのを利点と考えた。当時林業科を本科と言ひ、三年間かかつて卒業だ。寄宿舎では一年生として、二年生、三年生からはシボラれるのは人生勉強だ、と平然として猛者にシボラれた。が卒業後は学卒という事を胸に秘して年期奉公に入った。

本科というものの目的はあくまでも役人、役職で何年たつかわからないが、やつと係長か部課長だ。

しかし専修科は徴兵検査後は腕次第で事業家として独立も、社長ともなれる、三年卒の本科より早く定年退職も何もない社長となれる。手腕次第で事業家になれるのだ。生徒時代は木専と言われ、小馬鹿にされた。本科生曰く、「これからの社会は木工なんて機械がどんどん出来る時代だ。職人なんて何だ」と笑つていた。生徒同士の笑い話だったのだ。しかし私は自信

たっぶりだ「その大機械を駆使して大事業、大工場をやるのは誰だ」就職して部課長になる奴には引けを取らない大社長になつて見せるなんて私は反抗したものだ。案の定、私が木工場の動力許可を取りに役所の林務課へ行つたら二年先輩の〇〇君が部長となつてキセルで煙草を吸つていて節約生活が目についた。係が違つていたので私は見てみぬふりをして用を済ませて帰つた。私は完全に定年の無い、使用人三〇人の社長であつた。実業家志望と勤め人の差はこんな所に歴然としてあるのだ。頭上に圧迫の無い実業は人によつては燃える希望とも言える。

しかし当時の岡部校長は、木工科短命とはいえ専修科を創設した事は、緑を愛し木を愛する地球を今考えると先見の明があつた人物と感謝する。

世界の砂漠を森林にしてみせる。もう二百年の命を与えてくれたなら、なんて夢をみれるのも、我々山林生ではなかるうか。何をおいても山林のない世界はあり得ない。木曾山林は世界の山林学校である。

これを何千の卒業生が今世界中に点在して証明している。今日の思い出は、岡部校長以下二百名近い手植えの桜が、裏山演習林に生い茂っているだろう事を想像している。

本校舎より寄宿舎のほうが大きかつた我々学生時代の懐かしい思い出は、山ほどあり書き尽くせないので一応この位で筆を置く。

(了)

木曾山林高校と共に生きた私の半生 (生徒時代)

二七回・木専一回 奥原万喜男

昭和四年四月、木曾山林学校に木工専修科が設置された。当時、日本でも有数の林業校として知られていた山林学校に、将来木材加工方面の人材育成目的で木工専修科の設置されたことは、学校当局はもちろん、地域社会の協力のあつたことはいふまでもない。

募集人員は三十名で、修業年限は一カ年(但し希望により卒業後一カ年研究生として学校に残ることが認められていた。)

一日の授業時間も技術の修得を主体に構成されていて、授業時間中約半分は実習時間であり、その他の科目は、修身、国語、英語、体育、教練、木工材料、木材工作、製図等々であつた。部活動としては陸上、剣道、柔道、弓道、庭球部等があり、それぞれに所属していた。

当時、林業科はすでに卒業回数二六回を数え、卒業生も千三百名に上つていた。朝鮮、台湾を始め全国各地の林業界の他、各方面で活躍していた。その頃林業科の募集人員は五〇名となつていたので、林業科三クラス、専修科一クラスで、少なくとも全校で百六〇七〇名の生徒は在籍していたことと思われる。それから特筆すべきことは、全国で数少ない林業校であつた

ため、県外、郡外からの入学生が多く、寄宿舎制度のあったことである。当時の郡外、県外出身者は名簿でも判るが、特に岐阜県出身の生徒が多かった。また、中には朝鮮、台湾からの生徒もいた。

それから当時は、年齢の四、五才多い生徒が入学していたことも珍しいことではなかった。中には二五、六才まで軍隊生活を過ごし、陸軍曹長の階級を持った生徒もいて、教練の時間には助手で教えていた変わった生徒もいた。何れにしても現在の高校では考えられない学校生活であった。

職員数は校長以下教員十七、八名と、事務室その他で二十数名だったろうか。校長、教頭も授業を受持っていた。

学校生活も一学期も過ぎれば大分馴れてきた。専修科は実習が多かったので、木工具の使い方や技術的な面での苦労はあったが、なんとか簡単な作品は出来るようになっていた。

在校生とも通学途上や部活動などの面で顔見知りも多くなっていったが、特に三年生にはクラス全体で教室に呼ばれ時々ハッパをかけられたので怖かったが、個人的には親切にしてくれた人が多かったように思う。

一学期のテストも無事修了し、学校も夏休みを迎えた。休み中も特に登校することもなく、一カ月近い休みも宿題と家事の手伝いで終了した。

二学期に入ると学習の他に、見学旅行やスポーツ大会など学校生活も何かと忙しくなってきた。木工専修科の実習設備も夏

休みの頃から、電動機械など最小限のものが設置されてきた。生徒の実習作品も入学当初に比較すれば技術的にも一段と上達してきていたように思われる。この頃から学校でも塗装にクリヤーラッカーを主として使用するようになっていたので、作品の仕上がりも良くなってきていた。

十一月に入り、たまたま郡下の生産物品評会が開かれ、その会場に専修科生徒の実習作品(数百点)を出品売却し、約三時間の間に売り尽くされ、大変盛況であったことを聞いている。

二学期も終了し、三学期に入るとぼつぼつ進路のことが、話題に上るようになり、自分でも真剣に考えるようになってきた。木工専修科として一回目の卒業生を出すことになるのだから、学校当局としても就職先等については、ある程度考えていくれたことと思われる。

昭和五年三月、一年間の修業年限を終えて吾々二七名は木専一回生として卒業式を迎えた。しかし、一年間の修業年限では知識技術共に不十分であり、就職しても十分な仕事出来るようなわけにいかなかった。

その頃、さらに学習を続けたい希望者には、あと一年間学校に残ることのできる研究科を置くことになり、卒業生のうち七名の者が学校に残り学習を続けることになった。就職希望者は、大半が東京方面や県内の家具製作や木材加工関係の会社に就職したが、ある程度の見習期間は必要であった。

私も研究科生として二年目も学校に残ることとなり、実習を

主体にさらに学習を続けた。四月には木専二回生（二〇名）を迎え先輩として学習に懸命だった。木工機械の使用も許可され、ある程度の塗装技術が修得でき、技術の上でも一段と向上が見られた。秋には一年生の作品と合同の展示会も開かれ好評のうちに即売された。

卒業式当日は研究科生の終業式もあり、二年間にわたる学校生活を無事修了した。

この頃世間は一般に不況時代になりつつあり、就職口を見つけることは苦勞であったが、地元の小さな木工会社に就職でき、私の社会生活への第一歩は始まった。その後二十年近く山あり谷ありの生活を経て、母校に木材工芸科が設置（昭和三二年）された翌年教員としてお世話になるわけだが、当時このようなことはもちろん知る由もなかった。

（了）

二八期の回想

二八回 今井 茂男

私共二八回生が入学したのは昭和三年である。昭和中期に校舎の全面改築が行われ、今でこそ近代的校舎に生まれ変わっているが、当時は大正初年に建てられた二階建ての木造建築、それが私共三年間の学業の場であった。

あのころ在校生は全校を通じ二百人足らずであったように記

憶する。当時林業専門の高校は全国的にも数少なく、しかも創立も古いとあって就学生は全国各地から参集した。それだけに年配者も多くすでに軍歴を持ったもの、また何年かの社会生活を経た者などもおり、高小卒即入学のわれわれは学年の如何を問わず何かにつけて圧倒されるような感じを抱いたものだ。

今と違って当時は軍国華やかな時代である。その影響もあつてか、学校の校風もなかなか厳しいものがあり、学校生活の中で、また教科の中でよくそれを痛感したものだ。

あいさつは校則によつて挙手の礼である。上級生には歩行しながらの挙手も許されたが、教師に対しては校長や軍事教官だけに限らず誰にでも停止して行う。それが鉄則、軍隊並みに敬服の意志を強請され、下級生ほど神経を使ったものだ。

通学の途次、正服正帽、冬はマントを引つ掛け、素足に下駄といういわゆるパンカラストイル、これが一般的な通学姿である。そして左手に鞆を抱え歩行中、突然教師に遭い、慌ててマントの下から右手を引つ張り出す、余り見られた図ではなかったと思う。

また連動的に思いだされるのが、校内で折々下級生絞りが行われたことである。油を絞るといふ意味である。休憩時間、上級生の教室から突然呼び出しがかかる。呼ばれた者は並いる上級生の前に直立不動の姿勢をとらされ、「あいさつが悪い！」「態度が大きい！」などと罵声を飛ばされる。

真空地帯といわれたかつての日本軍隊の私的制裁ほどではな

いが、呼ばれたら弁解が効かない。「以後気を付けます」で退散するのが落ちである。

聞いたところによると、寄宿舎でも夜の集会で、下級生が油を絞られ、そのあげく舎監の眼を盗んで脱柵、インザ（学校の上にあった店、俗称インザスカイの略）へ駄菓子を買いに走らされたこともよくあったという。

さて学校の思いつとなれば当然学習のことが多いはずだが、この印象は意外に少ない。講義のあと応用問題を出題、指名して壇上で説明させられることが多かったのはM教諭。

黒板に向かってチョークを走らせながら「わしの眼鏡は鏡と同じだ。見ていなくても君らの動きは手に取るように分かる」とうそぶくN教諭。

授業中講義を急に止め「考査！本を伏せろ」といきなり予期しないテストを始めたA教諭……等々。何れも実力を付けさせるための策であっただろうが、われわれにとっては全く油断のできない一コマであった。

こんなこともあった。林価算法のテストの時間、出題を配ったまま教壇で読書に専念のY教諭、すわ好機とばかりに大半の者が平然と参考書を抜け丸写しし、誰もが満点のはずであった。ところが学期末、通信簿を開いたら何と甲乙に交じてこの学科だけ戊とある。しかも赤い丸印が付いて「朱点学科注意」と注釈まで付いている。不思議なことにこの通信簿だけが、今でも私の手許に残っている。全く皮肉な話である。

教科中、おりおり軟派振りを発揮し笑顔の多かった先輩のY教諭、柔道着の間から赤い下着をチラつかせたこともあり、よくユーモラスな話題を振りまいたS教諭、時局柄硬派教師の多い中でわれわれにとっては肩のほぐれる存在であった。

あのころ学校の方針として育林、測量、農業など実地学習に重きがおかれていた。巻脚絆、地下足袋姿でよく演習林や今は黒川ダムの湖底に沈んだ耕作地に向いた。造林地の下刈実習で一列横隊に並び「両手間隔、鎌に開け！」というA教諭のユニークな号令をよく聞かされた。ある時は農業の実習で、糞尿を満ばいにした肥桶に同教諭自ら片手をつ突っ込み、百姓根性に徹せよとばかり、全員右へ習えをさせられるという臭い一幕もあった。

とにかくこんなことを繰り返すうち、三年間の課程が終わった。そして珍しく(?)一人の落第もなく卒業の期を迎えた。昭和六年の事である。

われわれ二八回生は、入学時共に蘇門をくぐったのは七十七名であった。そして三年後蘇門を後にしたのは四九名。差引き二八名の級友はいつか知らぬ間に学窓を去っていた。それが誰であったか、面影すら浮かんでこない。

四九名という数字は、俗に言う「始終苦」と語呂が合い、なんとなく気になる数字であった。われわれの多くは、即就職を期待しての入学であったが、時あたかも世界経済大恐慌の真っただ中、しかも満州事変勃発直前で求人はいくつもゼロであった。

かろうじて学校の推薦で職を得た者は一割たらずにしか過ぎなかった。その多くは幾月かの、また幾年かの浪人の末あの手この手でどうにか職にありついた者ばかりである。職種のなんたるかはもちろん論外である。

時代の差とはいいながら、いわゆる引く手あまたの売り手市場・青田刈りまでして金の卵を狙うという平成初期の現代とはまさしく雲泥の差といえる。

蘇門を去って六〇年、二八回生のわれわれは、昭和四十年全国各地に散在する三〇名の現存者が相寄り「二八会」と称するクラス会を結成した。お互いに寄る年波のため、今は二三名となったが、会結成より毎年一回所をかえ会を続けている。

かつて昭和四六年「創立七〇周年記念の会」に際しては、母校の庭に記念樹を植栽し、ときの校長先生によくやったと喜ばれた。

また昭和五五年には、卒業五〇年目を期にお互いの回想記をまとめて会誌を発刊。われわれの教科や年代にちなんで『年輪』と名付け、生涯の記念とした。会誌の中に、当時の校長清水吉平先生、われわれに教鞭をとっていた増田篤志先生から発刊の祝詞を頂戴したので、学校の図書室にも会誌をお届けしたように記憶している。

恩師 増田篤志先生

二八回 安江 宗七

木造二階建ての古い寄宿舎で同室でもあった、日下部英吉君が一足先に八七歳で他界した。彼の短歌とのかかわりは、少年期にあつたらしいといわれているが、「蘇林」と称し多くの歌を残し、その遺歌集に

修めたる樹芸の技を生かすべく 気負ぬき昭和六年の春

という一首がある。四九名の同級生は、皆こんな気持ちであったと思う。しかし時はまさに昭和不況の真ただ中であり、志に合う所を得るのは非常に難しい時節であった。

その後、戦中戦後の激動の世に生きながらえたが、互いに消息を語り合う機会も得られず三〇数年を経ってしまったといつてよいであろう。

昭和四〇年現存者数名でクラス会を結成することが出来て、二八会と名付けた。以後所を変えても年に一度は集まるように努めてきたが、その語らいの中でも恩師増田先生の話が多かったように思う。

平成十一年は三五回目の二八会を東京で開いた。北海道・富山からも出席してくれて現存者の半数六名が集うことが出来た。

増田先生も百四歳で御存命と承りうれしいことである。この際先生の思い出を少しでも記念誌に残しておきたいと思ひ稿を起こした次第である。

大道義治君は、私の呼びかけに答えて「増田先生万歳」と書けといつて幾多の思い出を送ってくれた。

今井茂男君は数多い学校の教科の中で、自分の好むものはなかなかないのだが、妙に幾何という科目に興味を感じた……と。その後長く林業土木にかかわるなかで処理に迷い、在学時代に受けた教訓をもっとしっかり身に付けておけば良かったなあ、と反省することしばしばであったという。

一年生のときは幾何を教わった。先生が教室に入ってこられると一瞬間とした。教壇をふまれて起つ背筋の伸びた立ち姿は今でも目に浮かぶ。授業はなかなか厳しかった。「こんなことがわからないか、寄宿舎へ帰つて行李の荷造りにかかれ」とか、「そんな事では全然ダメー」とか気合を入れられることが多かった。先輩の話だとこんなことは毎年のことで新入生に与える愛の鞭だといわれていた。

二、三年次では測量を習った。先生は口癖のように「よその学校では、測量器械などは生徒に見せて説明するだけのことが多いようだが、私はみんなを実習で鍛え、就職したらその日から仕事一人で出来るようにするのが方針だ」とよく聞かされた。

お陰で私も測量の仕事は新米時代でも決して他に引け目を感じ

じたことは無かつたように思う。

平板・コンパス・トランシットでの測量は、現場作業員、製図プラニメーターによる面積算出など通して学んだ。演習林の林班・小班の設定測量をして、誤差が免諒限界に収まって誉められたことなど懐かしい。

昭和五八年六月三日第十九回の二八会を京都で開き、先生の米寿を祝った。御夫妻お揃いで御来席いただきしばらく青春時代を語らう機会を得ることが出来た。

先生は、木曾から奈良県下の三つの高校の校長を経て昭和三〇年に退官されたが「木曾山林の皆さん、職員生徒ともみんな堅実で明るく、楽しく、木曾は最も理想の学校であった」と記された回顧録を頂いた。

また私生活では一口食べたなら三〇回嘔むことが健康の基といわれましたが、米寿を迎えられてもなおそれを守っておられたのには頭が下がる思いがした。結婚式などに招かれた宴席の中でもこの鉄則はかたくなに守られていたようである。食事時間が余りにも長くなるので同席の人から「あの年寄りには良く食べなはるな」と陰口を叩かれたことさえあるとか、今にして思えば長寿健康の秘訣はこんなところにもあったのか、と思いを新たにしました次第である。

先生は絵画にも親しんでおられ「蘇水」の雅号で色紙をよくものにされた。今井君も自分の独作の色紙を持参しお褒めをいただき、先生の色紙をいただいて今でも床間を引き立てていた

だいているとのことであった。

先生も頑張つて百四才の長寿を得られ誠に敬服の至りである。先生の長い人生に心から感謝を捧げて擲筆する。(了)

●コラム 懐旧・昭和六年の春

二八回 故 日下部文嘉（蘇林）

修めたる樹芸の技を生かすべく 気負ひるき昭和六年の春
採用通知の届きぬ新任地は九度山・高野営林署

雇ヲ命ス月俸参拾貳圓ヲ給ス 受けし辞令のいかめしかりき

山官の卵の修業は高野山伐木事業所現地にはじまる

かうやまき・ひのき・もみ・つが・あかまつにすぎを高野
の六木とせり

同期安江宗七の紹介により、故日下部文嘉（蘇林）の美
代夫人より遺歌集『山彦』を本校へご寄贈いただいた。同
書から五首選んだ。

冒頭の歌は、安江も「思い出の記」に引用して述べる
通り、二八回生の誠に意気軒昂、心意気の高いことを如
実に物語る歌である。もちろんこれは、全卒業生の思い
でもある。

思い出の記

三〇回 池田孝次郎

昭和十七年五月、温暖の地静岡熊切分担区から、北海道北
部の留萌地区小平薬村所在の沖内分担区勤務を命ぜられ、一人
津軽海峡を渡つて着任した。

渡北して今年で五七年目を迎え、今は道北の街旭川市神楽の
地を永住の地と定めたが、年齢も老いて現在八六歳を迎えた。

私は出身が上松町だったので、専ら汽車通学で同級生五人と
福島駅から学校まで徒歩で通学した。あの頃の懐かしい友は他
界して淋しい限りだ。

恩師で懐かしく思い出すのは、厳格そのもののような気迫に
あふれた増田先生の授業や実習を忘れることが出来ない。先生
から、精神的な気力を若い心に、そして身体に植え付けられた。
北海道の広大な自然の中で幾多の試練を受けたが、跳ね返す
気力と身体を鍛えてくれたのは実に増田先生だ。今も心から感
謝している。

友と汽車通学の三年間は本当に懐かしい思い出となった。よ
く木曾福島駅で饅頭を買って食べたことやあの味を何時も思い
出し懐かしんでいる。

また、神庭先生が一度旭川へ来られた時、雪の降る旭川の街
を語りながら歩いたことも懐かしい思い出である。

昭和八年三月、母校と別れて以来を振り返れば六六年の歳月が過ぎ去った。私は本州の山々から北海道の森林に回りに来たりさまざまな樹木に接し共に生きてきた。木を植えたり伐採したり大自然相手に生活してきた。樹木と共に生き抜いてきた私は木曾山林学校を出てよかった。このことを常に誇りに思っている。

懐かしい校歌の一節

千秋変らぬ緑をこめて 五木は生い立つみ国の林

これをいつも心の中で歌っている。蘇門会の総会などでも大きな声で歌うことがあるが、ここが私の一番好きな一節である。

静岡地方勤務の頃は、杉やもみの大木、けやきの大木を倒し、北海道へ渡ってエゾ松・トドマツの伐採や育苗をやった。

木材搬出作業では、林鉄運送・木馬運材・自動車輸送・馬糞運搬等あらゆる作業を実行し経験した。大半は伐木主任官として苦労したが、大きな事故もなくどうやらきりぬけてこられた。

北海道へ来ての一番の思い出は、終戦真近の昭和十九年、冬山の大東亜特別伐採で飛行機用材としてヤチダモ、マカバ、クルミの三種類のみの三万石伐採である。広大な雪の山を毎日スキーで回ったこと。苦しかったけれど、日本が勝つ為に必死になって闘った。勇壮な気持ちの毎日であった。作業員に召集令状がくれば、全員を集め伐根の雪を払ってその上に立って、応

召兵を励ましたものだ。

学生時代、演習林での作業は気力と体力を鍛えてくれた。木曾山林の後輩達よ、どうか実習林で身体と精神を大いに鍛えてほしい。

測量実習ではトランシットの疎動や微動でやかましいの実習歌は思い出して懐かしんでいる。計画課勤務の時、境界確定係では大いに助けられたものである。

旭川蘇門会支部で名実ともに偉大な人、我等の指導者であり会の顧問をされていた唐沢繁夫様が、昭和五年九月八日御逝去されて早や二〇年が経過した。私共の蘇門会総会には出席下さってご指導やら御叱正をされたが、あの慈父のような穏やかな笑顔を私共は忘れることができない。

宴会となれば、飲み且つ食べて歌ってくださった面影がまだ私の脳裏に生きておられる。あの面影を何時も思い起こし、淋しさの中にも限らない惜別の情に耐え、今後益々しつかりと気持ちを引きしめて旭川支部の発展に尽くしたいと思う。

終わりに母校のますますの発展と、諸先生方のご健康をお祈りして擱筆とする。

(了)

創立百周年と第三〇回卒クラス会と私の思い出

三〇回 小佐波一雄

母校創立百周年をお祝い申し上げます。

私は、一九一五年（大正四年）二月生まれの八五才。富山県富山市に生まれ木曾に移り住んでいた。学校は一九三三年（昭和八年）第三〇回の卒業で、卒業生四二名であったが、今ではクラス員は十五名に減った。

満州事変・支那事変と暗い戦争の真ただ中であり、また不況のどん底で就職口もない時代であった。卒業直後病氣となり、療養生活を余儀なくされた。その間、家業の木炭業と鉱泉宿（二本木温泉越中屋）に従事していた。

当時、木炭が林産物の主流となっていた。長野県がこの木炭の県営検査を始めたので、私はその検査員となり、それから後林産物検査員として本庁（長野県庁）へ勤務することとなった。

長野市に移り住み、長野県林務部の林政・林業の二課および、商工部観光課勤務の技術工員として定年まで勤務することができた。

話はさかのぼるが、一九三五年徴兵検査で、体格的には甲種合格は間違いないとまで言われながら、その前々年の病気がもとで第一乙種とされた。第一補充兵となり、現役で兵役に就く

ことは不可能となった。軍人まで志望していたが、それも不可能であった。一九三八年、当時の東京目黒の近衛輜重兵連隊に教育召集されたが、即日帰郷となり、長野市に戻り復職となった。一九四二年、金沢市の東部第五部隊に臨時召集され、一ヶ月後、満州第四六〇五部隊に転属した。学校卒業の際の教練検定がものをいい、幹部候補生を志願させられ、部隊の経理部に属し、満州に二年半、終戦は中支那で迎え、部隊下級士官として無事復員することができ、復職することもできた。

定年後は、県内の団体、長野県板金工業組合の常務理事、事務局長というように林業とは全く無関係ながら、山林魂というか万能に通用する知識技能なのか結構便利に使われ、八〇歳まで十六年間勤められたのをうれしく思っている。

これには、多くの方々の支えがあつてのことであり、関係各位の皆様深く感謝申し上げたい。

すべて山林学校卒業のお陰であると思う。一九三三年に卒業した皆さんの内、大東亜戦争の犠牲となられた多くの方々のご冥福を祈つてやまない。

さて、クラス会は、地区ごとには何回か開かれ、お互いの健在を喜び情報の交換や親睦を深めていた。一九三七年松本の御母家温泉で神庭英先生を招いて開き、十五名出席したのが初めてであり、一九四〇年岐阜県下呂温泉で渡辺操先生を招き十七名出席以来、毎年地区の数人が当番で開催している。

一九五九年、京都嵐山では増田篤志先生、重本勝先生を招き

開催。一九八四年より家族同伴で毎年開催し、本年度三〇回に及んでいる。その都度、情報の交換や親睦を深めているクラス会には校歌・実習歌にはじまり、最後は木曾節とその踊りで締めくくりにし、次回を楽しみにおひらきとしている。

その他、時には地方への旅行を兼ねて二泊することもあり、盛会で蘇門会報にも何回もその模様は投稿し報道された。

また、母校の四〇・五〇・六〇・七〇・八〇・九〇年の創立記念日には各々何人かが集まっている。

さて、昨年は十一月初めに最後になるかもしれないという名古屋の下枝君の誘いで愛知県の南知多で開かれ、家族を含めて十六名の参加であった。一九八七年、湯田中の会のおりには、長野市の善光寺で慰霊法要を営み、関係の方々の冥福をお祈りした。

当時、韓国の孫福東君と台湾の邱合慶君が同級におり、この二人には格別の思いをもっている。孫君は、家族も来日していたとおもう。寄宿舎に入っていたので、在校中は格別親しかったという思いもないが、孫君は卒業後国に帰り県の役人をしていた。

同期生に原田光雄君がおり、同氏の言葉によると終戦までは一緒だったが、その後の事は不明であるという。消息がつかめず非常に残念である。

邱君は一九八二年愛知県定光寺でのクラス会に、日本への旅行日程を合わせて開催し一夜宴を共にして旧交を温めることが

できた。

最後に、林業低迷のおりから多方面に人材を送れる母校のますますの隆盛と関係者のご多幸をお祈りして、母校百周年の彌栄を祈りたい。

(了)

旧師の面影を偲んで

三三回 中村 金一

昭和八年四月に私も四四名は、小さな胸を膨らませて入学した。校門前の桜のつぼみも八分の膨らみを見せていた。

入学時の担任は、英語担当の宮原次一先生であった。先生は野沢中学（旧制）から転任して来られた新進気鋭の素晴らしい東京外語出身の先生であった。

授業では、リーダーの教科書などは一学期で終わり、後は副読本としての簡単な英語詩、アラビアンナイトなどを次々と学習したこと、さらに詩文と普通の文章の違いなどに触れられたことなど今でも懐かしく思い出すし、口ずさむことができる。

実業学校で上級の専門学校に進学するでもないのに、語学力を良くつけてくれたものと感謝の気持ちで一杯である。

入学当時の校長中村三郎先生は茨城県の方で、旧制一高、東京帝国大学林学科のご出身であられた。一年生には、当時の修身を受持って教えてくださった。今でも忘れ得ないことは、

入学当初の初めての授業に開口一番の言葉である。即ち、

「君たちは何でも学びなさい、勉強しなさい。そして、後でそれらの知恵を整理しておきなさい。例えば、泥棒の仕方を研究したとしても、この知恵を防ぐことに利用するか、実際に泥棒するかは、その人の考えによる。」と。

これは多分、色々な知恵を積極的に求め後日に整理して、より良い活用を心がけるようにせよとの事だと思われる。これに強烈なインパクトを受けたのは、私一人ではないと思う。今思えば私自身の雑学の吸収に、そして専門馬鹿にならないようにとの教えではなからうかと強く思う。

先生のお話から、教育の一面としてたどるときは理解できなくても、後日に理解ができるようになったり、そのことを生かす側面というものを持っているものであることを感ずることがある。

先生は、アメリカから林業の専門誌を取り寄せられていた。

これこそ林業の最新の知恵を広く先進国に求めていた姿ではなかったかと思う。

教頭は増田篤志先生で、先生は福井市の方で北海道帝国大学林学実科のご出身であった。幾何学、測量の学課と測量の実習が担当であった。徹底したスパルタ教育で、大いにしごかれたが、絶えず他府県の林科の学校の名前を挙げ、それらの学校の卒業生に負けないうようにと闘争心をかきたてられたことが忘れられない。

これらの教育は、確かに現代にはそぐわないかもしれない。しかし私たちは、それぞれが自負の下に社会へと一歩踏み出し、今日がある。誠に感謝である。

その後、増田先生は奈良県の吉野林業学校の校長、更に郡山農業学校の校長、そして新制田原本高校の初代校長を最後に勇退され、大阪府茨木市で悠々自適の日々を送られて現在一〇五歳の長寿を保っておられる。

次席は小菌井澄先生で、旧制の秋田鉱専のご出身で数学を担当され、私たちは代数・三角関数を教えていただいた。先生はまた、生徒指導の中心でもあり、生徒にとっては誠にこわい存在であった。

当時は、生徒の通学状態によつて徒歩・汽車・自転車通学・寄宿舎とに分かれていた。

何れにしても怖い存在には変わりがない。物事をてきぱきと処理される方であった。

先生は、その後朝鮮総督府所管の工業高校教頭に転出され、戦後郷里の富山へ帰られたということであるが、詳細はわからない。

在学中、博物学（動物学・植物学・鉱物学）、森林数学、林価算法、幾何学の用器画（幾何画法）で作図を、また森林経理学での土地期望価などの出てくる数式は、ほとんど理解できず、数式の暗記に終わったことを思い出している。

これらの教科は重本先生に教わったが、先生は旧制の佐賀高

校から京都帝国大学林学科のご出身で、達筆・極めて几帳面な性格であられた。生徒の質問に対しても、不正確かなと思われる時は、絶対に即答はせず「書物を調べてくるから」と、後から正確な回答を示される事が多かった。

従って、私たちは陰で「学者、学者」とニックネームをつけたが、学識の高い先生は私どもには過ぎた先生であったと思っている。

先生は戦後、京都府立大学の教授になられ、さらに生活科学科の部長をされた。ラテン語で植物の学名ラベルを学校周辺の樹木に添付され、学生に覚えるよう配慮されたとのことである。

造林学、森林利用学は神庭英先生で、先生は島根県の方である。三重高農林学科のご出身で苗床での樹木の苗木の管理、演習林での造林、下草刈りなどの実習を担当された。長身にして淡々とした話ふりとスマートな容姿にあこがれと親しみを感じたものである。

神庭先生はまた、クラブ活動のテニス、陸上競技の円盤投げなどを指導された。あのきれいなフォームでテニスをなさっている姿が眼の裏に焼きついている。また、炭焼きの実習指導も印象的であった。

久木田先生は鹿兒島の方で、旧制東京高等工芸のご出身。木材工芸と数学を習ったと記憶している。

趣味の魚釣りは本格的なもので、休みの日にはイワナ・ヤマメを専門に釣っておられたが、これも良き時代であったからだ

ろう。

先生は、何故か「ホース」というニックネームであった。後に郷里の鹿兒島県立加治木工業へ教頭として栄転されたと聞いている。

小柄な市川清先生は、県内の東筑摩郡麻績の方で、旧制岐阜高農の農芸化学科出身。先生は、農業一般を教えられた。この他に化学、相撲の顧問などつとめられていた。

木曾福島町役場前の広場に特設された土俵で、町を挙げての「明治天皇ご駐輦記念相撲大会」には、当時の木曾中（旧制）との対抗試合では、それまで毎年負けているのを勝つために猛練習を続けた。

その結果昭和十年六月の大会で、はじめて圧勝したときは先生と全校生徒にとって最高の喜びの日であった。山林の相撲の伝統は、先生と当時の生徒によって創られたといっても過言ではあるまい。学校の士気は、このことを契機にさらに高揚した。

国語・漢文は大竹亀次郎先生が担当しておられた。特に、漢文は興に入れば、赤壁賦などは朗詠のなかで解説されたり、諸葛孔明の出師の表は感を込めて朗読されて、生徒のわたくしたちを十分にその雰囲気浸らせてくれたものである。先生は、その後福島へ新しく出来た教育会館へ移られた。

当時は武道という必修科目があり、柔道・剣道・弓道の内どれか一つを選択しなければならなかった。柔道は、若林勝衛先生が木曾中との兼務で担当されていた。柔道の先生らしく、百

三〇キログラムという堂々たる体格で、性格は至って磊落であり、生徒からは「ベアー」の愛称で親しまれた。

剣道は、福島朋末先生。通称「ラッパ」の愛称で生徒に親しまれていた。生徒にはつねに熱弁をふるい、時には大言壮語となったので、このような愛称になったらしい。

弓道は、国語の大竹亀次郎先生が担当され、熱心な指導が印象的である。

学生時代は昭和の初期、それも日支事変前であったから、切羽詰まったような戦時色はまだなく、比較的のんびりとした中でも、週に一回の教練の時間は緊張したものである。

原先生が配属将校として、当時の松本歩兵五十連隊から派遣され、教頭と同位の重要な存在であった。先生の階級は少佐で、至って温厚な形式ぶらず、所謂大正デモクラシー的な方であった。

当時はまた、年に一回の軍事査閲がグラウンドで展開されたが、その日のために猛訓練が行われた。悠然として、悠揚迫ることのない教官の指導を受けたことが思い出される。

三年生になると、松本歩兵五十連隊へ宿泊訓練に出かける。小銃を担って四列縦隊で営門に入る時、衛兵司令が号令して原先生に敬礼し、また営内でも、生徒の我々は「原先生」といつも気さくに呼んでいたのに、兵隊は遠くから見かけただけで、歩調をとって「敬礼」と大声を発するのを見て、今さらながら「偉い方なんだなあ」と思い直したり、また、若干は得意な気

持ちだったことが、昨日のように思い浮かぶ。

助教としては、特務曹長、後の准尉の中島豊作先生が配属将校の補助となっていた。先生は、さらに体育の授業を受け持たれ「トクサン」の愛称で親しまれていた。先生は、戦時中に召集されてスマトラに征かれ、帰還されたが職業軍人とのことから本校へ戻ることはできず、菅平にある国立の体育関係施設に就かれたと聞き及んでいる。

教練の成績は、後に松本の連隊区司令部に「士官適」「下士官適」と評価区分の上報告されて、将来軍人になった時、一方は「甲種幹部候補生」として士官に登用され、他方は「乙種幹部候補生」として下士官になる。

いずれかに登用されかの判断資料としての重要な要因としての働きをしていた訳である。

木工実習は、渡辺操先生であった。先生は木工専修科を中心に教えていただいた。山梨県のご出身で、気さくに生徒作品の仕上げに関わっていただいた。

林業科の助手の先生は、長谷川竹治先生であった。達筆な先生で、何もかも筆で書かれておられた。先生は後に帝室林野局木曾支局管内に転じられた。良き先輩先生であった。

校長先生は、一年の後半（昭和八年）に高久常敬先生に代わられた。この校長先生に在学中ずっとお世話になった。先生は、栃木県那須の方のお方で、東京帝国大学農学部出の農業専門の先生だった。

蘇門会の先輩方は、農業専門という所が若干不満のようでもあり、先生もやりづらい事が多かったのではないかと思われる。私自身が、母校に助手として残るようになったので、校長先生の外、奥様にまで特別に可愛がっていただき、良き薫陶を受けたことを有り難く懐かしく思い出される。

事務は、三溝管之先生。松本のお方で、当時は福島町の山平から通勤されていた。誠に恐い存在であった。当時は「書記の先生」と呼んでいた。給仕として中平さんという小身瘦躯ながら、難しい三溝書記先生によく仕えておられた。

私自身が助手として母校に残ったので、卒業後に在職された先生方を思い出すままに記してみたいと思う。

まず高久校長の後任として、茨城県立石岡農業学校の校長から石田恭吾先生が着任された。先生は、旧制第二高等学校から東京帝国大学農学部を出られた一見ドイツのヒトラーによく似た先生だった。

特に私は、この石田校長先生のご指導で、当時の文検の合格を果たすことができた。いわば、人生の方向づけをして下さった、恩義の深い先生でもある。

特に文検合格の通知が県からあり、文部大臣名の教員免許状が校長の手に届いた時は、わがことのように喜んで下さった。

助手という極めて低い存在の自分を自宅へ呼んでお祝いして下さいったことは一生忘れられない。深く深く脳裏に焼きついて

離れることがない。本当に立派なお方であった。

先生は、その後福島県立福島農学校の校長として転勤された。召集されて戦地に在った私に「福島農業に君の席を空けて待っている」という暖かい便りをいただいていたが、南方へ転戦して実現できず残念であった。

戦後、復員したときに先生は、既に亡くなっておられた。復員後、是非お会いしてお礼を申し上げたいと思っていたのに誠に残念至極である。

わたくし共の卒業後、市川清先生は塩尻農学校に、その後新潟の高田農学校の校長として赴任されたようである。その市川先生の後任として長野中学校（旧制）から細田一郎先生が赴任された。先生は、埼玉県飯能市の生まれで、東京農業教育専門学校出の研究熱心な先生であった。

いつも何かの実験をしていて、そのデータを研究雑誌に発表しておられた。その後、郷里に近い熊谷農学校に転任された。先生は、生来あまり健康な方ではなく、早逝されたということを知った。

国語は、百瀬潔先生が大竹先生の後任としておいでになったが、その任期は短くその後任として袖山富吉先生が着任された。当時先生は新婚早々であったと思う。また苦学力行の先生で、洪沢家へ書生として入り国学院大学を卒業の後、文検高等教員国語科の免許を取られた先生で、私にとつては良き先達のような方で、余暇にいろいろ体験を聞かせていただき、大いに発奮